

Title	山中篤太郎著 イギリス労働運動小史：労働運動の理解のために
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.10 (1963. 10) ,p.996(112)- 997(113)
JaLC DOI	10.14991/001.19631001-0112
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19631001-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

山中篤太郎著

『イギリス労働運動小史』

—労働運動の理解のために—

イギリス労働運動史に关する研究書は多いが、邦文では比較的少ない。山中教授の著作は、その数少ないひとつであつて、つぎのような点で注目に値する。すなわち「労働運動とは何か」という序章において、(一)労働運動の意義と重要性、(二)労働運動と労働問題、(三)労働運動における現実と意志、(四)労働運動と労働組合運動という四つの視点から、労働運動の本質にふれようとしていることである。これは、労働運動をもつて、革命的な政治運動や社会主義運動一般に解消してしまおうとする立場や、あるいはこれと反対に、労働運動に労働組合運動として、労働運動がもつ多様性を没却しようとするもの(その代表的な立場として大河内一男教授)にたいして、いわばその両者を包括するともいふべき立場に立つておられると思う。ややくわしくみて

少こう。

著者はまず、つぎのように労働運動研究の重要性を訴える。「広く人間の社会のやみ難い発展の論理が、労働運動の中に宿っており……われわれは、労働運動の中に単に労働者の集団的な運動の姿を見るだけではなく、労働運動の中に全体としての社会の発展の論理が示されていると思う」(三三四頁)。すなわち著者によれば、労働運動とは、資本主義社会の生成とともに生まれた新しい現象であり、重要な社会性をもつところの社会現象であることを強調している。ところで労働運動の発展を、(一)労働組合運動、(二)労働者消費組合運動、(三)労働党ないし社会党運動の三つにわけ、この三者があるときはそれぞれ自由に、あるときには、密接不可分の関係において労働運動を構成したというのである。この著者の立場は、G.D.H. コールの労働運動史観と軌を一にするものであり、注意すべきことは、これら三者が、機械的に列挙されるのではなく、労働運動の発展段階のなかで、それぞれに位置づけられなければならないと思ふ。

つぎに労働運動と労働問題との関係であるが、著者によれば、「社会が、労働問題を社

一一二(九九六)

会的に重要な関心の的として意識するようになったのは、特定の労働関係の成立が前提条件となつてゐるわけである」(二四頁)。と述べているが、重要なことは、国民経済が自己の胎内に生じつつある問題として、労働者の問題を認識することから出発するのにならして、労働運動はそうした社会的国民経済的認識を誘発する大きな要因であることである。この点についての評価は、当然、国家による上からの労働運動にたいする対策となつてあらわれざるをえない。いわゆる社会政策の必然性もここに胚胎するといわなければならない。

著者はさらに、第三節労働運動における現実と意志において、労働運動の発展は、その国の歴史的な諸条件や、労働者階級の主体的条件の相異によつて規定され、運動の展開そのものが複雑な様相を呈することを指摘し、組合の型も、各国それぞれにその特殊性が反映してゐるとのべてゐるのは興味深い。序章の最後に著者は、労働運動のなかにしめる労働組合運動の重要性を指摘しておられるが、労働組合にたいする政党支配の問題が論議されてゐる今日、注目すべき問題を秘めてゐるといへよう。

以上、筆者は、本書のなかでもっとも重要と思われる序章についてその概略を紹介したが、この部分は熟読するに値すると思う。全体の内容は、

序章 労働運動とは何か

第一章 世界におけるイギリス労働運動

第二章 イギリス産業革命と労働運動の生

起展開

第三章 ヴィクトリア黄金時代と労働運動

の確立

第四章 帝国主義イギリスと労働組合運動

の成長

第五章 経済の統制・計画化と労働組合運

動

イギリスのみならず、日本の労働運動の研究者も、本書をよまれることを期待する。

(春秋社・一九六三年五月刊・B6・二二八頁・四八〇円) —飯田 鼎—

岡 稔著

『計画経済論序説』

—価値論と計画化—

従来、主として量的な生産増大にその力を集中してきたソ連の経済発展が、最近次第に

新刊紹介

効率的な生産をその主要な課題とするように、資源や労働力の最適配分の計画化をとりあげる傾向にあることは、すでによく知られてゐることである。この場合、その計画化の原理としてマルクス経済学の価値論が必要であるのか否かは、ソ連の学者にとつてはもちろん、欧米の学者にとつても最大の関心事であつた。

これに対して、岡氏はきわめてはつきりした態度をとられる。「社会主義のもとでの計画化と経済計算に关する一連の最も基本的な問題を、労働価値論との関連をぬきにして取扱うことはできない」といふのは量的分析が計算単位としての労働価値を欠いては成立しないばかりではなく、国民経済の計画化といふことが、本来、人間労働の節約といふことと不可分の関係をもつてゐるからである。

こうして著者は、価値論にもとづく計画化の方法を、ソ連の学者の無数の論文を整理し、あとづけながら追求している。とくに本書で興味深いのは、価値の統計的測定をあつかつて、価値の実測法を紹介しているところと、利潤率について述べている点であろう。価値の測定といふのはたしかに斬新な提案

ではあるが、自由市場を前提としない場合、賃金をはたして労働価値とみなし得るのか理解できないし、むしろこのような提案に対するクロンロードやクワシヤの反論を詳しくききたいところである。

さらに後の問題については、「価値」論者と「生産価格」論者との論争を示し、「生産価格」論者が現実のソ連経済の欠点を意識していたが、その解決を示さなかつたとして、ノヴォジロフやカントロヴィツチの議論が最後に紹介されているが、著者自身はこの立場に近いといふことを意味しておられるのだから。

いずれにせよ、この複雑きわまりない論争のジャングルを、そして誰かがやらなければならなかつた仕事を手ぎわよく処理された努力にはただ敬服するのみである。

(岩波書店・A5・二七四頁・七〇〇円)

—加藤 寛—

川田 侃著

『世界経済入門』

本書の著者、川田侃助教授は日本ではまだ新しい学問である国際関係論を専攻されてい

一一三(九九七)